HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌遠友夜学校の誕生と発展 ： それを支えたものは何か
Author(s)	三上, 節子
Citation	基督教學, 52, 1-28
Issue Date	2017-07-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70085
Type	journal article
File Information	01mikami.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論　文

札幌遠友夜学校の誕生と発展
－それを支えたものは何か

北海道基督教学会会員　三　上　節　子

はじめに

新渡戸稲造夫妻が有志者と共に創設し、貧しい子供たちや晩学者のために五十年間教育活動を展開した札幌遠友夜学校（一八九四～一九四四）[1]の誕生、発展、終焉について記した記録や研究はこれまでに多くある。古くは遠友夜学校が校務として作成した『遠友夜学校一覧』（明治四四、昭和五、十一年）、『遠友夜学校記録集』（大正七年）、『事業報告』（昭和三、十一、十五、十八、十九年）である。また閉校後に記されたものとして、財団法人札幌遠友夜学校が札幌遠友夜学校の敷地を札幌市に寄附し、その敷地に札幌市が札幌市勤労青少年ホームとその中に「遠友夜学校記念室」を完成させた昭和三十九年に、最後の代表であり校長であった半澤洵北大名誉教授と教師、会計、理事として長く遠友夜学校運営に関わった高倉新一郎北大教授が中心となって編集した、古典的名小著、財団法人札幌遠友夜学校発行『札幌遠友夜学校』（一九六四年）がある。その後、山内壮夫制作の「新渡戸稲造萬里子両先生顕彰碑」が札幌市勤労青少年ホーム玄関前に建立された昭和五十四年に新渡戸稲造博士顕彰会編、冊子『新渡戸稲造博士－顕彰碑建立記念誌』（一九七九年）が、そしてそれを追うようにさっぽろ文庫(18)『遠友夜学校』が一九八一（昭和五六）年に出版された。その後も遠友夜学校が自身や社会に与えた影響の大きさを偲ぶ元教師や元生徒たちによる機関紙や地

域新聞などへの寄稿記事も数多い。[二] 校内に溢れていた大正デモクラシーの薫り高い雰囲気やすさまじく不穏に揺れた終焉の経緯を新渡戸稲造への尊崇をもって語る元教師、松井愈による『遠友夜学校に学んで五十年』（稿本）（一九九一年）、元教師、元生徒らの思いやその後の研究成果を収録した札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編『思い出の遠友夜学校』（一九九五年）、校内雑誌である『菫会雑誌』、『文の園』、『倫古龍会雑誌』、『遠友魂』、『遠友』の一部を収録した同事業会編『札幌遠友夜学校資料集』（一九九五年）、近年では三上敦史「札幌遠友夜学校の終焉－北海道帝国大学関係者による社会事業と総力戦体制－」『北海道大学百二十五年史』（二〇〇三年）、三島徳三「『遠友夜学校』校名の由来と『独立教会』」『新渡戸稲造研究』第一五号（二〇〇六年）、同氏「新渡戸稲造と遠友夜学校－現代の教育課題とのかかわりで－」（北海道基督教学会『基督教学』第四五号、二〇一〇年）がある。また元生徒への聞き取りを中心にまとめた中川厚雄『遠友夜学校研究：昭和初期の生徒を中心に』（二〇一〇年）、元教師の五籐精知文書を調査してまとめた同氏『札幌遠友夜学校研究Ⅱ：昭和十二年から十五年五籐精知氏を追って』（二〇一五年）、また、遠友夜学校元教師・元生徒のほぼ全員に顕彰の目を当てた同氏『札幌遠友夜学校研究Ⅲ～教師事典～』（二〇一六年）、『札幌遠友夜学校研究Ⅳ～生徒事典～』（二〇一七年）がある。

二〇一一年、勤労青少年ホームの老朽化に伴う解体・閉館によってその中に設けられていた「遠友夜学校記念室」が跡地から移動したことに警鐘を鳴らし、[三] 跡地に遠友夜学校記念館を建設し、そこから遠友夜学校精神を継承実践することを二〇一三年に提唱した団体、「一般社団法人　新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会」の設立に相俟って、遠友夜学校の誕生、発展、終焉を再検証し、再考、再発見、再興の活動や研究が盛んになった。拙論「札幌遠友夜学校跡地の放つメッセージ」、「札幌遠友夜学校の誕生と貢献」『新渡戸稲造の世界』第二二、二三号（二〇一三年、二〇一四年）のほか、藤田正一、冊子『札幌遠友夜学校』（二〇一五年）、そして遠友夜学校の廃校に対する見解につき近年三上敦史氏に反論を示す論文二本、藤田正一「北海道大学百二十五年史掲載論文『札幌遠友夜学校の終

焉』に反論す」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』第二二号（二〇一五年）と、須田力「戦時期の札幌遠友夜学校の教育に関する一考察」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』第二三号（二〇一六年）が出た。上述の会が企画した札幌遠友夜学校創立一二〇周年記念作文・論文コンクールでの優秀賞論文、須田洵「新渡戸稲造の思想と札幌遠友夜学校の今日的意義」と谷口稔「新渡戸稲造の『武士道』と札幌遠友夜学校に学ぶ」（二〇一五年）などもあり[四]、研究者層が一層拡大した感がある。またどの新渡戸の伝記においても量の多少はともあれ遠友夜学校への言及がなされている。

この小論の目的は、第一に今までの遠友夜学校に関する書物や論文、冊子等において遠友夜学校の誕生の時期と場所、メリー夫人の実家の孤児の女性からの遺贈がいつ届いたのかおよびその金額について、十分な吟味がなされず、初期の書物の記述を踏襲して通説が流布していることを質し、信頼できる資料に基づいた考察を通じて正しい結論を導くことである。第二に校名の由来と命名時期について、信頼できる資料に基づき再吟味をし、定説を得たいということである。第三に五十年間の遠友夜学校の存続を支えたものは何であったかを考究することである。

第一章　遠友夜学校の誕生にまつわる通説の吟味

（一）遠友夜学校の誕生の時期と場所－豊平日曜学校を引き継ぎ、その後向かいの土地へ移転

多くの伝記作家が遠友夜学校誕生の経緯において依拠している高倉新一郎編『札幌遠友夜学校』のその箇所の記述をまずここに掲げることとする。

明治二十六年、万里子夫人の手元にアメリカの実家から一千弗の金が届いた。夫人の厳父ジョセフ・エルキントン氏は米国フイラデルフイヤ市に住み、開拓当時からの旧家で、フレンド派に属する熱心な清教徒であつたが、すこぶる慈善心に富み、博士の談話によれば、「世話好きで、

いろんな人を世話し、或は家に泊めて置き、或は都合して困つて居る人を助けるのが道楽であつた。」

という愛の実践者であつた。一人の孤児を孤児院から引取つて、十四、五才の時から家族の一人として育てていたが、その女もまたエルキントン家に仕えて忠実に事に励み、ついに嫁がずに六十余才を以つて歿した。送られた金は、恐らく零細な小使銭が節約されて貯蓄されていたと思われるその人の遺産の一部で、遺言によつて小さい時から世話をし妹同様だつた夫人の手許にまで届けられたのであつた。父君に恥じない篤信の夫人は、この金を私事のために費消するに忍びないと考え、博士に相談した結果、翌二十七年一月、当時札幌の東部豊平橋の附近にあつて、信者ならびに札幌農学校生徒有志等によつて経営されていた札幌独立教会附属日曜学校につづく敷地および家屋を買い取り、貧乏な家庭の児童ならびに晩学者を集め、夜学校とし、博士自ら教え子なる札幌農学校生徒有志と共にその経営に当つた。博士の理想はかくして異郷の一婦人の篤志によつて実現したのである。（中略）[五]

（傍線、筆者の付加）

この記述は事の内容が愛情深く書かれ、真実も多く含まれるのであるが、傍線の箇所に遠友夜学校の誕生の場所、時に関して曖昧さが隠しえない。以下において、遠友夜学校の誕生の場所と時に関して、各種の資料に基づきその通説の批判吟味を行いたいと思う。

メリー夫人の書いた一八九一年五月二十八日付「母（マリンダ・パターソン・エルキントン）宛書簡」[六]によると、メリーは、一八九一（明治二四）年三月稲造が札幌農学校教授に着任してまもなくの五月二十七日に稲造から豊平日曜学校が資金難で廃止されそうだと聞き、二人で様子を見に出かけている。この豊平日曜学校は札幌基督教会（現札

幌独立キリスト教会）の有志、馬場（のち竹内）種太郎（伝道師）、中江汪、星彌平、姉の星ハナノ、那須次郎、菅原カツエらが一八九〇（明治二三）年五月に始めたものである。この日曜学校には貧しい身なりの子どもや赤ん坊の弟妹をおんぶした子どもが百五十人も集まっていたという。メリーは資金難を解決したいと思い自分だけではなく農学校教授のブリガム氏にも依頼する。しかし、その支援もむなしく四年で豊平日曜学校は閉校せざるを得なくなる。新渡戸夫妻はその日曜学校の建物を引き継ぎ、今まで来ていた子どもたちのうち普通科目を教える夜学校になっても来続けたいという子どもたちを引き受けるのである。明治四十四年版『遠友夜学校一覧』「沿革」には左記の一、二のように、昭和十一年版『遠友夜学校一覧』「沿革」には三のように記されている。

一、遠友夜学校ノ前身

明治二十三年五月札幌独立基督教會有志ノ賛助ヲ得テ札幌南三條東四丁目一番地ニ同教會日曜学校ヲ開始シ之ヲ豊平日曜学校ト称シ毎日曜一時間ツツ宗教教育ヲ施ス、当時馬場種太郎氏（後ニ竹内ト改姓ス）之ヲ主管シ星弘平、星花野、那須次郎氏等ノ盡力尠ナカラス、其後馬場氏札幌ヲ去ルニ当リ中江汪氏之ニ代リ、（中略）生徒百名余ニ達シ家屋狭溢ヲ告クルニヨリ南四條東三丁目に移轉ス、（中略）

二、遠友夜学校創始時代

明治二十七年一月農法学博士新渡戸稲造氏有志者ト相謀リテ遠友會ナルモノヲ組織シ貧民児童並ニ晩学ノ子弟ノ為メ普通教育ノ道ヲ開カントシ前日曜学校生徒中ノ有志者ヲ収容シ以テ現今ノ夜学校ヲ開始セリ（中略）

三、夜學校草創時代

明治二十三年五月札幌獨立基督教會ノ有志者ニヨリ創設セラレタル、同教會附属豊平日曜學校ハ札幌區南四條東四丁目一番地ニアリテ、毎日曜一時間宛宗教教育ヲ施スヲ以テ目的トシ、爾後事業ヲ行ヒツツアリシガ、數年ニシテ閉鎖スルノ止ムナキニ到レリ。（中略）有志者ト謀リ遠友會

ヲ組織シ前記ノ日曜學校ノ教師有志及ビ札幌農學校生徒ノ援助ヲ得、此處ニ遠友夜學校ヲ開始セリ。コレ本校ノ嚆矢ナリトス。

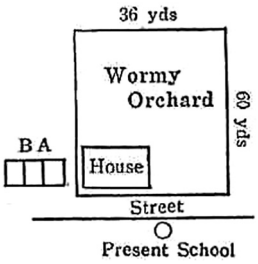
（傍線、筆者の付加）

ここで最初の遠友夜学校が始まった場所を吟味してみよう。上記のように明治四十四年版の『遠友夜学校一覧』によると、「札幌南三条東四丁目一番地」（この地名はまだ中央区など区制がなかった時代のもので現在の中央区にあたる）となる。ところが、他の一覧である『遠友夜学校記録集』（大正七年）では、最初の豊平日曜学校の場所は「南三条東四丁目一番地」と最初の豊平日曜学校のあった場所のままであるとし、日曜学校の移転には言及せず、その後に「明治二十七年新渡戸稲造氏遠友會ヲ組織シ」云々とある。昭和五年版、十一年版の『遠友夜学校一覧』には「一、所在及ビ目的」において、「本校ハ札幌區南四條東四丁目二番地ニアリ」とあり、生徒が百余名に達したため豊平日曜学校のあった「札幌區南四條東四丁目一番地」から「現今ノ位置ニ移動セリ」と「二、沿革」に述べ、遠友夜学校は番地一つのみ移動したと見ているようだ。ただし、この昭和版二書にはメリー夫人からの寄附が言及されている。昭和五年版には「明治二十七年一月・・・夜学校ヲ開始セリ。其當夜學校ノ嚆始ナリトス。是ニ要セル資金ハ新渡戸校長夫人萬里子女史ノ寄附ニ依ルモノナリ」とある。昭和十一年版では「翌明治二十八年七月、該家屋並ビニ敷地五百二十一坪七合ヲ買入レ、ココニ本校ノ基礎ヲ確固タラシムルヲ得タリ。然シテコノ際ニ要セシ費用、五百二十五圓ハ創立者前校長新渡戸稲造妻、現校長万里子夫人ノ寄附ニヨルモノナリ」とある。

さて、一八九一（明治二四）年五月稲造夫妻は日曜学校見学に当たり、どの住所の場所に行ったのであろうか。南三東四の一の地なのか、南四東三の地なのか、それとも南四東四の一の地なのか、メリー夫人は母宛書簡で子どもたちが百五十人も来ていたと記しているが、判断はむずかしい。しかし、上記引用文の一の下線部「中江汪氏」が馬場種太郎を引き継いだのは、『札幌独立キリスト教会百年の歩み』によると一八九〇（明治二三）年九月からであり、

中江が引き継いでから生徒数が百名を超したので移転したことがわかる。[七] とすると、新渡戸夫妻が訪問した日曜学校は移転先の南四東三の場所であったと考えられる。そして新渡戸たちは一八九四年一月に、上記引用文三の下線部「此處ニ」とあるように四年で閉鎖になった日曜学校の場所で夜学校を始めたのである。それゆえ次の稲造の一八九五（明治二八）年七月四日付「義弟ジョセフ・エルキントン宛書簡」（『全集』二二巻）は大いに納得がいくのである。

今晩の私の主なテーマは遠友夜学校（"the Ragged School"）のことです。（中略）私たちは学校の向かい側に家付きの土地を買うことに決めました。土地は次のようになっています。（筆者：左図参照のこと）次の手紙で、もっとくわしい話を書きます。買い入れに五百二十五円支払い、家の修繕は来週始まります。家の設計図なども次回お送りします。土地は、今、譲渡手続きをしている最中です。この地所は、一区画全体ではなく、ＡＢと印した所には小さな借家がいくつか建っています。そして、これらの借家の建っている幅二十四ヤールの土地は私たちの地所に属しているのです（"belong to our lot."）。私たちは全部を買う予算がありませんので、一部を分筆してもらいました。あと、三百円ありますと、ドルで百五十ドルくらいですが、土地全部が買えます。[八]



（傍線と（　）内日本語は筆者付加、（　）内英語は原文の引用）

この書簡と図面から新渡戸が始めた夜学校は旧豊平日曜学校の建物（中央区南四条東三丁目）であり、向かいの購入した土地は現遠友夜学校跡地（中央区南四条東四丁目）、そして道路は現跡地の西側の道路と考えてよかろう。つまり、場所に関する記述は明治四十四年版「沿革」が信頼出来るのである。夜学校の開始の時期はどの「沿革」にもあるとおり、明治二十七年一月である。それは、豊平日曜学校閉校後その場所で始まったということである。古い家付き土地を購入したのは、この書簡を書いた一八九五（明治二十八）年七月四日より少し前ということは揺るがない事実であろう。そしてその購入費用はメリー夫人の実家に孤児として引き取られて家族同様に育てられ、メリーの乳母や遊び相手となることで、また家事やクエーカー・ボンネット作りで貯めたお金から六十歳余りで死を迎えた時にそのうちの一部一千ドル（二千円）がメリーへと遺言により遺贈されたことで賄ったのである。創立以来遠友夜学校創立記念日は旧札幌市勤労青少年ホーム玄関前に設置された「札幌遠友夜学校跡地　明治二十八年六月十八日創立」と半澤洵理事長の筆跡を刻んだ石杭の日付と同じである。[九] その日から向かいの新しい土地での学校生活がささやかに始まったということではないだろうか。

次ぎにこの書簡の二番目の傍線部「A～Bの土地」についてであるが、値段が三百円とすれば幅二十四ヤード長さ六十ヤードの土地となろう。購入していれば現面積（一六八七平方メートル）の一・五倍以上の面積となるので、購入しなかったと考えられる。最初期の夜学校の描写は昭和十一年度の「沿革」『遠友夜学校一覧』では「部屋數二ツニ過ギザル家屋ヲ之ニ當テタリ」とされ、明治四十四年版「沿革」では、「斯ノ如キモノ約二カ年校務益々盛大ニ赴キ生徒数十名ニ達シ校舎ノ狭溢ヲ告クルニ当リ喜多島慶次郎氏二十四坪ノ校舎ヲ建築寄附ス」とされている。喜多島の寄付は明治三十年のことであり、また明治四十二年からの校舎増築の時にも新渡戸校長、有島武郎代表らの寄附に混じって、喜多島は「喜多島慶次郎氏寄附の一棟に尚ホ用ツヘ（ママ）キフ」とあり、寄付を惜しまない人であっ

た。研究者のなかには喜多島が隣接する「A～Bの土地と家屋」を寄附したのではないかと考える人もいるが、そうではなく彼は「新渡戸の購入した土地の空いているところに二十四坪の新築の建物」を寄付したと考えるのが妥当であろう。彼の寄附のお陰で毎週二回の授業から毎晩二時間の授業ができるようになり、子どもたちは尋常高等小学校の課程を教わることができたのである。ちなみに喜多島慶次郎は一八五五（安政二）年生まれ、実業家で明治二十一年大島正健の時代に札幌独立基督教会に入会している。

（二）遺贈の時期と金額

ところで、高倉新一郎編『札幌遠友夜学校』とさっぽろ文庫⑱『遠友夜学校』、松隈俊子『新渡戸稲造』（一九六九年）等では、遠友夜学校は一八九四（明治二七）年一月に思いがけずメリー夫人の実家に住む孤児の女性からの遺贈一千ドル（いくつかの書に二千ドルとある）[1]が稲造家に届いたので開始できたと書かれている。しかし、本論のこれまでの論究によって、明治二十七年一月に始めたのは豊平日曜学校の場所を借りての夜学校であって、現跡地（中央区南四東四）での開始は一千ドルの遺贈後からであることは、一八九五年三月二十二日付「義弟ジョセフ・エルキントン宛書簡」からも明らかである。そこには意味深長な、また中身を推察できるような文言がいくつもある。それを以下に傍線で示すこととする。

ちょうど一ヶ月前のお手紙が、ヴァンクーヴァー航路で今朝届きました。それには二百四円および三十三円の送金証明が同封され、また①前に出された手紙について書いてありました。しかし、②今日届いた郵便の前の便はどこかで引き止められています。（中略）貧しい子弟のための学校に関することと、③ご親切に送って下さった資金についてのあなたのご質問へのお答えは、④行方不明の郵便の到着を待った上でいたします。明日そのことについて会合を開くつ

もりです。⑤D・スカルからの資金はまさに入手いたしました。家つきの土地を、それで購入することができそうです（“may be able to purchase a lot with a house on it”）。くわしくは次回に書きます。[二]

推測の域を出ないが、⑤新渡戸夫妻の結婚式にも立ち会ってくれた弁護士、D・スカルからの資金は、家付き土地が購入できるかもしれない程の金額であったようだが、孤児の女性からの遺産とは考えにくい。そうすると③の「ご親切に送って下さった資金」とは冒頭の二百四円とか三十三円ではなく、孤児の女性からの遺産と言うことではないだろうか。そして、そのお金の送金証明とその資金に関する説明文書や使い道に関する質問書などを同封した郵便物がどこかで滞っていてまだ新渡戸の所に届いていないと言っているのではないだろうか。いずれ、この三月二十二日過ぎには孤児の女性からの遺産は届いたと言うことであろう。それゆえ先の七月四日付書簡で土地の購入手続きが今なされているのだと新渡戸は義弟に告げているのであろう。

ここで一つの疑問が湧いてくる。家付き土地の値段が五百二十五円であったのならば、一千ドルの遺贈がなくても友人達からの支援金でそれを購入できたのではないかということである。しかし、孤児の女性からの一千ドルの遺産がなかったならば、家の修理も机椅子、学用品、教科書の購入、学生教師たちへの僅かの学資援助も可能とはならなかったであろうと考えるのが妥当であろう。

そういうことで、遺贈の金額は、新渡戸が離札後二度目で最後の遠友夜学校訪問時の演説で語っているように一千ドル（日本円で二千円）であったと言えよう。そして遺贈の時期は豊平日曜学校の場所を借りて行っていた遠友夜学校が手狭になり広い場所に移るための資金を義弟やフィラデルフィア・アーチストリート友会の友人たちから受けとり始めていると記す一八九五年の三月二十二日から、家付き土地を購入したと知らせる七月四日の間と思われる。もしかすると（一）で述べたように遠友夜学校の創立記念日の六月十八日か、それに近い時期であったかも知れない。

ともあれ一八九五年に土地を購入したとする資料は数少ないが、石井満『新渡戸稲造伝』と、冊子、新渡戸稲造博士顕彰会編『新渡戸稲造顕彰碑建立記念誌』（一九七九年）の沿革年表と、北海道大学大学文書館製作のパンフレット「附属図書館・大学文書館共催企画展示 “With malice toward none, with charity for all” 遠友夜学校の歴史」（二〇一五年）の沿革略年表には書かれてある。それらの文書には順に「其の人はもとは可憐な孤兒であつたが、同家に救はれて家族同様に一生涯を終へた。其の死後其の婦人の遺言により、一千ドルの金が當時札幌に住つてゐた萬里子夫人の手に届いた。明治二十八年ごろのことである。」[二]、「明治二十八、七　万里子夫人の寄附により、五二一、七坪と前家屋を購入、基礎を確立する。」、「一八九五年　メアリーの寄付により、敷地・建物を購入」とある。

ところでそもそも、一八九四年にアメリカの孤児の女性からの遺贈が届いて家付き土地を購入したとする通説が流布した原因は新渡戸の昭和六年五月十八日に離札後二度目で最後の遠友夜学校来校における講演で、事を簡略化するためと思われるが二つの事柄を一つにまとめて話した遠友夜学校誕生の講話だと考えられる。以下にその講話の一部を紹介する。

學校の始めは今より四十年前私が外國から北海道に歸り米國で貰った家内を連れて來た。私の家内の父が世話好きでいろんな人を世話し、或は家に泊め居き或は都合して困って居る人を助けるのが道樂であった。或る時みなし兒で孤児院に居たのを引受けて養って居た。年は十四、五で女中よりも良く取扱ひ教育された。父も母も家も無いそれで父の養女の様にして居た。年は取っても嫁かず家に殘り家事を手傳ひ六十餘歳迄長らへて居たが遂になくなった。遺言に小使ひを蓄めた幾何を（二千圓と記憶するが）、家内にやって呉れと書いてあった。その金が札幌に來た。家内は其の有難い涙の籠った金、頼りない孤兒の蓄めた金をむざむざとは使はれぬ。何か世の不幸な、気の毒な人の為に使ふ道は無いかと云ふのであった。そこで私は「それはよい、丁度考へ

て居る事があって金が無くて出來なかったが豊平の橋の近所に小さな家が在り地面が有って其處には日曜學校を開いて居る星と云う人がある。あの土地とあの建物を買ひ、日曜のみならず毎日夜學校を開けば五十人にでも好い學校を開いては如何」と云ふと家内は「それはよかろう。そう云う様に此の金を使へば今のみなし兒も定めし嬉ぶでせう」と云って地面と前の古い校舎を買った。故に私が校長と云ふものの校主とも云ふべきは私の家内である。此の家内も自分の金でなく父の世話をした人の蓄めた金である。[二三]

また、最後の校長であり、財団法人札幌遠友夜学校理事長でもあった半澤洵も『新渡戸博士追憶集』（一九三六）で、事実は知っていたと思われるが新渡戸にならい、また、半澤洵から財団の事務を引き継いだ髙倉新一郎も『札幌遠友夜学校』（一九六四）の編纂において二人の言説を踏襲した。さらに以後の人々も資料不足のためかそれに疑義をはさまなかった。

さて、今回の考察で筆者が一番依拠した資料は『エルキントン家宛書簡』である。この書簡の存在は一九八三（昭和五八）年頃、稲造全集の増補七巻の翻訳事業と編集に携わっていた佐藤全弘氏のもとに同じく新渡戸研究者のジョージ・オオシロ氏からペンシルベニア州のスワスモア・カレッジ・フレンズ・ヒストリカル・ライブラリーにある稲造自筆の「エルキントン家宛書簡」十六通のコピーが届いて、初めて明らかになったものである。稲造の令孫加藤武子氏が翻訳し翻訳版が全集の二十二巻に、英文版が二十三巻に編集出版されたのが、それぞれ一九八六（昭和六一）年と一九八七（昭和六二）年であったのだ。そのため、それ以前の出版物であるさっぽろ文庫⑱『遠友夜学校』（一九八一）や古典的伝記、松隈俊子『新渡戸稲造』（一九六九）に『エルキントン家宛書簡』が生かされていないのは致し方ないのだが、その後の出版物や研究書にも、また第一章に髙倉氏の『札幌遠友夜学校』をそのまま掲載している『思い出の遠友夜学校』（一九九五）にも、生かされていない。これからの研究においては通説を批判的に吟

味してより正確な事実が記録されることを願うものである。

第二章　校名の由来と命名時期

校名命名の由来は、新渡戸の最後の来校講話の「元を質せば米國のような遠くから送って來た金且家内の發意にもより、又『有朋自遠方來不亦樂乎』とあるから兩方をとって遠友夜學校とした」[一四]の文言に依ることはよく知られている。そのほか、新渡戸の口からは一度も出てこないが、多くの研究者は八日目で夭折した長男「遠益」（トーマス）の「遠」も重ねて「遠友」と命名したに違いないと推察している。その推察を事実だと証明してくれたのが三島徳三「『遠友夜学校』校名の由来と『独立教会』」『新渡戸稲造研究』第一五号（二〇〇六年）である。三島氏は稲造の令孫加藤武子氏に依頼して門外不出の新渡戸の日記を調べていただき、その推察の確証を得たと言う。その日記には以下のことが書かれていた。

――一八九六年一月十日（金曜日）

大雪、夕方夜学校に行き、夜はメリーと夜学校に何か名前をつけるべく話し合う。メリーは私たちのベビー、トーマスの名前をどこかに組み合わせることを示唆した。亡くなった愛児遠益のトウをそのままつかうのはむつかしいので、トウをエンと読ませて、遠友とするのが一番われわれの思いに叶った。[一五]

また、三島氏は同日の日記のすぐ後の部分にも注目する。

夜学校から戻る途中、稲妻のようにわれに来るものがあり、大いなる創主なる神の声。耳を傾けさえするなら、富めるも貧しきもひとしく神の祝福はそそがれる。そして、神の声はわれわれの胸に満ち、大気にもみちみちて、天にいまし給う善なる神のかぐわしい香りは、大気の中に放

たれていた。わが家に帰りつくと、出産以来ずっと半病人のようになっていたメリーは、「急に勇気がよみがえり、キリストが私に歩みより、いやしの手をさしのべ給うのが感じられました」と言った。[一六]――

上記二つの文章から夫妻にとって遠友夜学校を始めるということは神からの神秘的体験を受けて、本当の意味で自らを神と人に捧げる覚悟が与えられての無償と謙遜の愛の奉仕であったことがわかる。これは、他の教師たち、生徒たちに何の感化も与えないでは済まないと考えられる。もう一つ、佐藤全弘氏は『新渡戸稲造事典』[一七]で、「遠くアメリカのフレンド（友会徒）の贈りものでできた学校という心もこもっていよう」と述べているが、そういう意味合いもあると考えられる。その孤児の女性もエルキントン一家や新渡戸夫妻と同様に敬虔なクエーカー派（フレンド派、友会）の信徒であったのである。そのように「遠友」には四種類ほどの意味が込められており、そのなかに「遠益」の意味も含まれていることを深慮するとき、新渡戸夫妻が他者の子どもを自身の子どもと同じ愛の眼差しで見ていたことは、それに関わる教師たちや生徒たちに良い影響を与え、遠友夜学校活動が途切れることなく、否、年を経る毎に活発になっていった原動力の一つではなかったかと考えられる。

さて、遠友夜学校は初期の頃子どもたちから「日曜学校」と呼ばれていたと新渡戸は一八九六年一月三日付「義弟ジョセフ・エルキントン宛書簡」で述べている。また、最後の来校講演では、ある教師から「唯夜學校では他に夜学校が出來たら困るから」校名をつけてほしいと言われたので命名に踏み切ったと言っている。そういうことで、遠友夜学校と命名が決まった時期は、新渡戸の日記の日付から考えて一八九六年一月十日過ぎということになるであろう。

第三章　札幌遠友夜学校五十年の存続を支えたもの－精神と人々

（一）無念の廃校から見えるもの－新渡戸の遠友夜学校精神：博愛主義と民主主義

一九四四（昭和一九）年、四月二十二日の役員会、三十日の総会をもって札幌遠友夜学校は廃校となるが、その決定に至るまでに理事の宮部金吾、半澤洵、高倉新一郎、評議員の山田幸太郎、平塚直治、小谷武治、戸津高知、藤田昌、半澤洵、ほか最後まで校舎を守り遠友寮に住んでいた教師の松井愈、沼田芳明らは一年前から廃校と校舎の逓信局への強制貸与を道庁と札幌市から迫られていて苦渋の選択をしたのであった。この廃校に関して三上敦史氏の前述論文は、軍からの強制はなかった、戦況が悪化し教師、生徒がほとんどいなくなったことが廃校の理由だとする。しかし、藤田正一氏、須田力氏は、札幌遠友夜学校が、教育勅語と軍事教練を生徒に課さず、アメリカ合衆国大統領として自由平等博愛と民主主義を標榜した「エイブラハム・リンカーンに学べ」を校是としていたので廃校を迫られる隙を十分に与えていたはずだと、三上論文に真っ向から反論する。須田氏によると『庶務日誌』第五号には昭和十九年二月から三月にかけて二度軍人が校舎と教師寮を細部まで点検しに来たと書かれているそうだ。また、札幌市、道庁も廃校を求める書面を何度か遠友夜学校に送っている。

廃校が強制であったことを裏づける根拠は遠友夜学校跡地を無償譲渡しその地に札幌市勤労青少年ホームが建設された昭和三十九年発行の『遠友夜学校』の「序」に半澤洵理事長の言葉、「周囲の事情で止むを得なかったとはいえ、新渡戸先生が札幌に残されたただ一つの事業ともいっていい札幌遠友夜学校が、昭和十九年三月廃校となり、その姿を消したのは、私どもにとってほんとうに残念なことでした」の文言である。また、高倉新一郎も同じ書の「はじがき」に「北海道における最も古い歴史を持つ社会事業の一つとして札幌の豊平橋畔に貧児教育を続けてきた札幌遠友夜学校も、例外としてその運命を免れる事ができなかった。閉校命令と共に、校舎は逓信局に強制貸与を命ぜられたのである」と述べる。

廃校への苦渋の選択を迫られて敗北から遠友夜学校精神の復活を希求した文章に遠友寮に最後まで残って残務整理をし、昭和十九年三月三十一日に退寮した松井愈の文章がある。以下を見てみよう。

私は、今も遠友夜学校が半世紀にわたって守り育ててきたものは、新渡戸先生によって据えられたリンカーン精神＝パイオニア精神であり、さらに言えば－北軍の将校として独立戦争（ママ）をたたかったクラークやケプロンーが札幌農学校の草創期にその学風として根づかせた、アメリカ独立宣言の人権と進歩と民主主義を基調とする人間性であったと考える。（中略）

さらに私は、札幌を離れた後も終身遠友夜学校校長でありつづけた新渡戸先生が旧制一高校長・東大教授・東京女子大学長として「新渡戸時代」と呼ばれる一時代を生み多くの人材を育てたこと、彼ら〝新渡戸門下〟が、大正デモクラシーの旗手として、さらには戦後の日本の思想界に残した足跡を、いわば札幌農学校の発展ととらえる必要があると思う。（中略）そのとき、遠友夜学校の存在は、そのルーツを探るくさび石として、重要な役割を果たすにちがいない。[一八]

（傍線、筆者の付加）

このように六百人以上に及ぶ主に札幌農学校（のちの東北帝国大學農科大学、北海道帝国大學）の学生であった遠友夜学校教師たちは、遠友夜学校教育の崇高な理念の一担い手であったことに大きな誇りを感じ、また小さき者への尊敬、愛情、謙遜を実践の中で学ばせてもらい、また生徒たちから愛情や勇気を与えられながら珠玉の経験を積み、大学での学問研鑽とともに人間としても大きく成長できたのである。松井は、遠友夜学校の教育活動は「アメリカ独立宣言」や「奴隷解放宣言」に通底するキリスト教的慈愛、人権、進歩、民主主義を基調とする人間性を体得実践し、さらにそれを生徒たちに継承していくという崇高な活動であったことを、またその精神は戦後の日本の思想界、教育界の指導的精神であったことを訴えているのである。実にいろいろな人が今なお書物、講演会、新聞寄稿などで

遠友夜学校の精神の素晴らしさを語り継いでいる。元遠友夜学校教師で、さっぽろ文庫⑱『遠友夜学校』の編纂にも深く関わった須田政美は北海道大学東京同窓会新聞である『東京エルム新聞』（昭和五十七年十一月十日付）でまさにそのことを述べている。下記の通りである。

札幌遠友夜学校はいまは存在しない、がその心の遺産はいまも札幌に、また全国の北大関係者の中に大切に蔵され、活きている。それは札幌農学校＝北大の精神的分身ともいわれるほどの縁の深い夜学校――札幌の貧しい家庭の子女に、りっぱな社会人としての教養を身につけさせる教育の機会を提供した――（中略）思うに新渡戸博士は、夜学校創設のとき、素志とした貧子弟教育と共に、教師として奉仕する後輩北大学生の多くに「社会を学ぶ」という教育の場を同時に創ってくれたのである。[一九]

（二）大正デモクラシーの精神－学生教師たちから生徒たちへ

明治中後期から日露戦争勝利の明と暗を秘めながらも、日本は明治初期に比べれば経済的文化的にひとまずは安定期に入り、西洋文化の咀嚼と客観的評価による西洋文化の日本文化への融合が試みられ、人間の生命の可能性を高らかに謳う理想主義、自由主義、民主主義、博愛主義、個人主義が言論界、出版界を席巻した。この大正デモクラシーと呼ばれる時代の牽引者には思想界では新渡戸稲造、吉野作造、宗教界では内村鑑三、賀川豊彦、文学界では夏目漱石、武者小路実篤、志賀直哉、そして有島武郎らが連ね、そのなかに札幌農学校出身者が三名、そして遠友夜学校関係者が二名もいるのである。ゆえに大正デモクラシーの精神は（一）で見てきたようにまさに遠友夜学校の精神そのものとも言えるのである。なぜなら大正デモクラシーの精神は、「アメリカ独立宣言」や「奴隷解放宣言」、クラーク博士、リンカーンの精神に通底する人権尊重、民主主義、人道主義に立脚しているからである。新渡戸稲造や学生教

師たちが大正デモクラシーの精神で遠友夜学校の生徒たちと触れ合い不平等や不条理においても正直・誠実を貫いて幸福を実現するのだと説く時、生徒たちにもその精神が育まれていったことは想像に難くない。

遠友夜学校生徒たちの文集である『文之園』、『龍古倫会雑誌』、『遠友魂』などには、青少年、少女たちの溌剌とした正直で誠実な若い魂のほとばしりが随所に見られるのでその感を強くする。また、それら雑誌の表紙絵や挿絵には、素朴ではあるが当時東京で栄えた大正ロマンを感じさせる夢や叙情性があり、当時の生徒たちのささやかな自由謳歌と未来への飛翔の思いが伝わる。この大正デモクラシーの精神は単に東京の新渡戸らやほかの門下だけに限られるのではなく、札幌遠友夜学校の正式に卒業した一千名、そして中途退学した五千名以上、無償奉仕をした札幌農学校、北大生を中心とする六百名以上の学生教師・教授たち、札幌市内外の多くの支援者たちにもその精神が支持され豊かに息づいていたと言えるのではないかと考える。人間として当然の権利を主張する大正デモクラシーの精神が遠友夜学校にあったことが五十年あるいはそれ以上に長く遠友夜学校とその精神の継続を可能にした二つ目の原動力ではないかと思う。以下の生徒、教師の文章から大正デモクラシーの一端が感じ取られるのではないだろうか。

『文之園』第拾號　ひつじ会　（明治四十一年三月三十一日発行）六〇～六一頁

面白かりし一夜　　佐々木とよ

ある月夜の晩我が樂しき夜學校より帰りしに晝の如く月はかがやきぬふと空を見渡すに御月様はいかにもまんまるく又御星様も美しく光をはなちぬ我れは月星を見ては感にたへず家に帰り机にむかひて静かに考へ思ひらへ何を見るにつけても我が心さへあの月の如くまんまるくかどをさ見ずば到る所事は中温に終り不和なからんとかく思ひ浮びし折りは實に樂しく感じぬ程なく夜はしだいにふけわたってなんとなく室はしづかになりゆきぬ實に面白かりし一夜なりき

ここには日中の不快なことも月の丸さに和まされる十二、三歳の少女の清らかな思いが綴られている。

「思い出集」『札幌遠友夜学校』（昭和三十九年発行）六七頁

母校遠友夜学校の思い出　　倉田藤吉[一〇]

最後に私は常日頃満足に思つておることは、遠友夜学校に学んだことを名誉と心得ておることである。このことは、私が今日あるのは、新渡戸先生を初め私どもを手をとつて指導して下さつた諸先生の御努力の賜であるのは云ふまでもありませんが、なほその外に、あの遠友夜学校校歌[一二]の精神であります。「沢なすこの世の楽しみの、楽しき極みは何なるぞ、北斗を支ふる富を得て、黄金を数へん其時か」と歌いながら、オー否否と否完（ママ）して二節三節と移つて行く。それにしたがつて私は何か胸にこみあげてきて、涙声になつて咽喉がかすれてゆくのですが、更に進んで「正義と善とに身をささげ、慾をば捨てて一すぢに、行くべき路を勇ましく、真心のまに進みなば」と歌ふにおよんで、気も晴ればれと元気付けられるのです。あの校歌の精神が私どもの心の内にすつかり刻み付けられ、強く正しく生き抜く信念を堅持し得たことと思ひます。私が遠友夜学校に学び得たことは私の人生の最も大きな誇であると信じます。

（傍線、筆者の付加）

傍線部に大正デモクラシーの息吹が感じられる。

『遠友魂』第六巻第二號【新渡戸校長來校紀念號】昭和六年七月発行

巻頭言　　監事　高杉成道[一三]

我等は尊敬せる慈父を親しく我校に迎へた。そして我等は恩人としての又慈父としての先生に我等胸にある

感激と感謝と歓喜との凡てを捧げ得た。我等の心に尚も残れるは感謝であり又先生の私達に残しになつた教訓の數々である。（中略）萬里子夫人の御兩親が一人の孤兒を己が家にて世話をしたのは愛の故である。彼女が遺言して殘して行つた金は彼女が萬里子夫人を愛せしが故の金である。先生が貧しき者の爲に學びの家を作らんとしたその精神これ愛である。（中略）愛は偉大である。愛は必ず犧牲を共にする。（中略）一人の孤兒の愛は遠友を生んだ。これ愛の成長である。我等は此處に愛の事實を見る。愛の力強さの事實を見る。愛の勝利を見る。そして愛は感謝を生む。我等は此處に感謝と感激の事實を見る。

愛の実践の始まりに愛があるということ、そして新渡戸、また高杉ら教師たちの思いのなかに、愛に愛をもって応答しようというキリスト教博愛主義があることを高杉は述べている。また遠友夜学校のなかに生き続けていた大正デモクラシーと博愛主義は創設者新渡戸夫妻以来の伝統であることも明らかとなる。

須田力氏は前出論文で最後の校長半澤洵は戦時期に教育の必要を感じるすべての人々を歓迎したので遠友夜学校に流民、アイヌ人、朝鮮人の男女も集まっていたと語る[二三]。

新渡戸が昭和六年五月十八日に二度目で最後の来校の際は、生徒・教師から大変な歓迎を受けたわけだが、講演の後に四つの書を揮毫している。「心清者福也」、「去華就實」、「学問予里実行」、「With malice toward none, With charity for all」である。その中の後ろから二つの揮毫が校是として運動場（体育館）の演壇前などに新渡戸稲造、リンカーン大統領の肖像写真とともに飾られた。そこにも生徒、教師の新渡戸、リンカーンの理想主義、自由主義、博愛主義等の思想への共鳴と尊敬が感じられる。

（三）特定の宗教教育はしなかった－各宗教の尊重

メリー夫人は一八九一年五月二十八日付「母（マリンダ・パターソン・エルキントン）宛書簡」で豊平日曜学校見

学の折の感慨として、

下層階級の人たちは、上層の人たちよりも、はるかにお寺の坊さんの影響を受けています。したがってその扱いには細心の注意が必要です。殊に、直接宗教のことを教える時は慎重にしなければなりません。そこ（豊平日曜学校）での教育の大部分は非宗教的なものです。なぜなら、子供たちは読むことをまず学ばなければならないからです。[二四]（　）内は筆者の付加

と述べ、また新渡戸も「義弟ジョセフ・エルキントン宛書簡」（一八九六年一月三日付）で、

彼女（看護婦の星ハナノ）は掘っ建て小屋に入って行き、母親たちに幼い者たちを学校に行かせるよう説いて回ります。ときどき子供を行かせるのをいやがる母親もいます。お金を払わされたり、子供たちがキリスト教を教え込まれはしまいかと恐れるのです。学校では宗教の話はしない方が無難です。なぜなら長い目で見ますと――私たちは忍耐強く信じる心を持たねばなりません――私たちがキリストの教えに従って行動する方が、言葉を用いるよりも、多くの人の心を捉えるのです。（中略）菅原夫人は賢明にも、キリスト教についてなにも言わないようにしていました。[二五]（　）内は筆者の付加

と述べている。フレンド派の人々の信仰のあり方は、言葉による伝道ではなく信仰を無言で行動に表すことをより価値あることと考えているので、二人のあり方は納得がいくし、賢明であり真の信仰と言えるのではないだろうか。新渡戸が草創期に何度となく講話で教えたリンカーンの生い立ちと成功譚、そして奴隷解放とゲティスバークでの演説の一節「何人に対しても悪意をいだかず、すべての人に慈愛をもって」からの慈愛の精神、また学問はただ学ぶばかりでなく実行に移すべし、あるいは学問より実践が大事といった意味を持つ「学問より実行」という二つの文言を彼は二度目で最後の来校の時に「心清者福也」、「去華就實」の文言とともに扁額に揮毫して今も残っている。この四つ

の扁額は非常にキリスト教的教えでもあるし、他の宗教にも通じる教えでもある。また、毎晩学業が始まる前に生徒と教師たちが力強く歌った明治四十二～大正三年まで代表であった有島武郎の作詩なる「遠友夜学校校歌」でも、例えば九番の歌詞「正義と善とに身をささげ、欲をば捨てて一すぢに　行くべき路を勇ましく　真心のままに進みなばアー　是れ　是れ　是れ　是れこそ楽しき極みなれ」などにも同様にどの宗教の人も深い感慨を覚える内容であり、生徒も教師も疑うことなく、素直に見習うべき教えとして歓迎できたのである。

札幌遠友夜学校経営において協働者であった親友宮部金吾も、札幌基督教青年会の有志が北大生のために設立した「青年寄宿舎」の会長に懇請された時、「一．舎生に宗教を強いないこと　二．在舎中は絶対に禁煙すること」の条件で会長を受諾したそうである。[二六] 宮部も自身は敬虔なキリスト教徒であったのだが、宗教の選択は個々に委ねたのである。そのように自己の宗教を強要することなく個々人の宗教を深く尊重し、およそどの宗教にもある慈愛という最高の徳目を校是としたところに新渡戸夫妻の卓越した宗教観があると言える。

以上より、札幌遠友夜学校が五十年存続し、そしてその精神は将来も受け継がれようとしている。その過去また将来の持続可能を支えた、また支えるであろう原動力、また魅力は、まず第一に他者の子どもを自分の子どもと同じように愛する、あるいは自分と同じように他者を愛する博愛が新渡戸夫妻、またその後継者たる遠友夜学校のボランティア教師たち、支援者たちに強くあったことであると考えられる。第二に大正デモクラシーと言われる、理想主義、自由主義、民主主義、博愛主義、個人主義に基づく人間愛が教師や支援者、生徒に広がり、お互いに人間的成長を確かめ合い、他者への思いやりと助けあいの意識が高かったこと、第三に特定の宗教にとらわれないでどの宗教の人をも受け入れる、個々人への尊敬と慈愛の精神が豊かであったことであると考えられる。

おわりに

以上、遠友夜学校の誕生の経緯に関する通説となっている事柄の吟味、また、遠友夜学校を五十年、否、それ以上の存続の可能性を支えている原動力についての考究を行った。この札幌と日本の宝とすべき札幌遠友夜学校精神の研究と継承、発展の活動は、ただ日本の恵まれている、あるいは恵まれていない環境の子ども、青年、大人の教育に示唆を与えるばかりでなく、全世界の恵まれている、あるいは恵まれていない環境にある子ども、青年、大人の教育や生命に現在、また将来にわたって大いに示唆を投げかけるであろう。そのためには残されている教育記録や生徒達の文集等の作品資料等からのさらなる分析研究が急務であり、その成果から現今の教育界の混迷を救う提言が導き出されるのではないかと期待される。

(註)

一　「遠友夜学校」の校名が「財団法人札幌遠友夜学校」と改称されたのは一九二三（大正一二）年で、理事は新渡戸稲造、宮部金吾、半澤洵、三島常磐であった。

二　『東京エルム新聞』や『北海道新聞』など。

三　札幌市は記念室を二〇一一年札幌市資料館に移設する。その後二〇一四年記念室のすべての資料を北海道大学に無償譲渡した。現在、記念室の資料はすべて北海道大学大学文書館の管理の下にある。

四　上記二論文は（一社）新渡戸稲造と札幌遠友夜学校を考える会編『札幌遠友夜学校創立百二十周年記念誌』（二〇一五年）に収録されている。

五　高倉新一郎編『札幌遠友夜学校』財団法人札幌遠友夜学校、一九六四年、四～五頁。

六　東京女子大学新渡戸稲造研究会編『新渡戸稲造研究』春秋社、四九四～五頁参照。

七　札幌独立キリスト教会教会史編纂委員会編『札幌独立キリスト教会百年の歩み』下巻、一八九三年、三〇六頁参照。

八　新渡戸稲造『エルキントン家宛書簡』（『新渡戸稲造全集』第二二巻）教文館、四五八～九頁。

九　石杭の文字板は「札幌遠友夜学校跡地」と「明治二八年六月一八日創立」の二つに分割されて新渡戸稲造記念公園に設置された銘板の説明文の下にはめ込まれて保存されている。

一〇　二千ドルの遺贈とする言説に、半澤洵「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」『新渡戸博士追憶集』（昭和十一年）（『新渡戸稲造全集』別巻、松隈俊子『新渡戸稲造』、花井等『国際人新渡戸稲造』（一九九四年）、柴崎由紀『新渡戸稲造ものがたり』（二〇一二年）、「日本一、世界一の校長　われ等の誇るべき校長」『北海タイムズ』第八面、昭和六年五月二十日付等がある。一時、旧札幌市勤労青少年ホーム「遠友夜学校記念室」の説明文も二千ドルと記されていたが、後一千ドルと訂正された。円とドルの単位の読み違えであろうか、今は一千ドルに定着したと思われる。

一一　新渡戸稲造『エルキントン家宛書簡』（『新渡戸稲造全集』第二二巻）教文館、四五五頁。

一二　石井満『新渡戸稲造傳』關谷書店、一九三四年、一五六頁。

一三「學問より實行－新渡戸校長のお話－五月十八日御來校」（②　学期報『遠友』から）さっぽろ文庫⑱『遠友夜学校』二七四～五頁。

一四　前掲書、二七五頁。

一五　三島氏の引用文は、加藤氏から三島氏に送られたキリスト友会日本年会新渡戸稲造記念講座講演会小冊子『祖父　新渡戸稲造のこと』（二〇〇一年）に収録されている新渡戸の日記文である。『新渡戸稲造研究』第一五号、二〇〇六年、一〇一頁。大津光男「キリスト友会の新渡戸稲造記念講座講演会」『新渡戸稲造と世界』第二三号、二〇一四年、一六三

～五頁参照。加藤武子氏の講演と同日記の引用に言及している。

一六　三島徳三「『遠友夜学校』校名の由来と『独立教会』」『新渡戸稲造研究』第一五号、二〇〇六年、一〇一頁。

一七　佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造事典』教文館、二〇一三年、五一頁。

一八　松井愈「おわりに　遠友夜学校と新渡戸稲造」『遠友夜学校に学んで五十年』（稿本）一九九一年、六七頁。

一九　須田政美「新渡戸先生と遠友夜学校」『東京エルム新聞』東京エルム新聞編集所、一九八二年、第二面。

二〇　この生徒は鬼鹿尋常小校尋常科を出て補習科の途中で札幌に出る。繿褸屋の家業を手伝いながら高等科の学業を修めたいとして十三歳で明治三十年に入学。教師は半澤洵、滝臣弼、岩波六郎（旧姓佐藤）、蛎崎知次郎、有島武郎、森本厚吉、末松績、足助素一らで、倫古龍会には時折新渡戸稲造、佐藤昌介、大島金太郎も集ったという。札幌中学校に進み、道庁等に勤務。

二一　遠友夜学校校歌は九番までである。作詞は有島武郎。

二二　高杉成道は昭和六年前後に教師、酪農学園大学教授、札幌教会長老。

二三　須田力「戦時期の札幌遠友夜学校の教育に関する一考察」一八～九頁参照。

二四　東京女子大学新渡戸稲造研究会編『新渡戸稲造研究』春秋社、四九五頁。

二五　新渡戸稲造『エルキントン家宛書簡』（『新渡戸稲造全集』第二二巻）教文館、四六四頁。

二六　切替辰哉「新渡戸稲造と内村鑑三と宮部金吾－そのアンビション・仁愛と道義－」『新渡戸稲造研究』創刊号、一九九二年、五九頁参照。

（参考文献）

第一次資料

1 『遠友魂』第六巻第二號【新渡戸校長來校紀念號】倫古龍会文芸部、昭和六年七月、、北海道大学大学文書館所蔵。

2 遠友夜学校『遠友夜学校一覧』明治四四年、北海道立図書館所蔵。

3 ――――『遠友夜学校記録集』大正七年、北海道立図書館所蔵。

4 ――――『遠友夜学校一覧』昭和五年、北海道大学文書館所蔵。

5 ――――『遠友夜学校一覧』昭和十一年、北海道立図書館所蔵。

6 札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編『札幌遠友夜学校資料集』同事業会、一九九五年。

7 新渡戸稲造「エルキントン家宛書簡」『新渡戸稲造全集』第二二巻、教文館、一九八六年。

8 Nitobe, Inazo. *Letters to the Elkintons*, in *The Complete Works of Inazo Nitobe*, Vol.23, Kyobunkan, 1987.

9 『文之園』第拾號、ひつじ会、明治四十年三月三十一日。

10 『北海タイムズ』昭和六年五月二十日付、マイクロフィッシュ。

第二次資料

1 石井満『新渡戸稲造傳』關谷書店、一九三四年。

2 大津光男「キリスト友会の新渡戸稲造記念講座講演会」『新渡戸稲造の世界』第二三号、新渡戸基金、二〇一四年。

3 切替辰哉「新渡戸稲造と内村鑑三と宮部金吾－そのアンビション・仁愛と道義－」『新渡戸稲造研究』創刊号、新渡戸稲造会、一九九二年。

4 財団法人札幌遠友夜学校『札幌遠友夜学校』財団法人札幌遠友夜学校、一九六四年。

5 札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編『思い出の遠友夜学校』北海道新聞社、一九九五年。
6 札幌市教育委員会文化資料室編、さっぽろ文庫(18)『遠友夜学校』北海道新聞社、一九八一年。
7 佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造事典』教文館、二〇一三年。
8 柴崎由紀『新渡戸稲造ものがたり』銀の鈴社、二〇一二年。
9 須田力「戦時期の札幌遠友夜学校の教育に関する一考察」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』第二三号、北海道大学、二〇一六年。
10 須田政美「新渡戸先生と遠友夜学校」『東京エルム新聞』東京エルム新聞編集所、一九八二年。
11 東京女子大学新渡戸稲造研究会編『新渡戸稲造研究』春秋社、一九六九年。
12 中川厚雄『遠友夜学校研究：昭和初期の生徒を中心に』私家版、二〇一〇年。
13 ――『札幌遠友夜学校研究Ⅱ』私家版、二〇一五年。
14 新渡戸稲造博士顕彰会編、冊子『新渡戸稲造博士－顕彰碑建立記念誌』同顕彰会、一九七九年。
15 花井等『国際人新渡戸稲造―武士道とキリスト教』学校法人広池学園出版部、一九九四年。
16 半澤洵「新渡戸博士と札幌遠友夜学校」『新渡戸博士追憶集』（一九三六年）（『新渡戸稲造全集』）別巻、教文館、一九八七年。
17 藤田正一「北海道大学百二十五年史掲載論文『札幌遠友夜学校の終焉』に反論す」『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』第二二号、北海道大学、二〇一五年。
18 松井愈『遠友夜学校に学んで五十年』（稿本）私家版、一九九一年。
19 松隈俊子『新渡戸稲造』みすず書房、一九八二年。
20 三上敦史「札幌遠友夜学校の終焉―北海道帝国大学関係者による社会事業と総力戦体制―」『北海道大学百二十五年史』

北海道大学、二〇〇三年。

21 三島徳三「『遠友夜学校』校名の由来と『独立教会』」『新渡戸稲造研究』第一五号、新渡戸基金、二〇〇六年。

22 「新渡戸稲造と遠友夜学校－現代の教育課題とのかかわりで－」『基督教学』第四五号、北海道基督教学会、二〇一〇年。

23 三上節子「札幌遠友夜学校跡地の放つメッセージ」『新渡戸稲造の世界』第二二号、新渡戸基金、二〇一三年。

24 ――――「札幌遠友夜学校の誕生と貢献」『新渡戸稲造の世界』第二三号、新渡戸基金、二〇一四年。